

第3回秋田市エイジフレンドリーシティ行動計画策定委員会での
 行動計画（原案）に対する意見・質問とその対応
 （対応について議事録に掲載済みのものを除く）

委員名	意見・質問	対応
武内委員	基本施策5-2「高齢者の声は届きやすい体制づくり」について、依然として聞く側つまりヒアリングという関係が拭い去れない。地域の財産である経験豊かな高齢者、やる気のある若者、社会に関心のある方々がタッグを組んで活動するという部分をどこかに反映してほしい。	基本方針4において、高齢者の社会参加に関する取組、基本方針6において高齢者の市民参加に関する取組が反映されるようにする。
菅生委員	P.1の本文8行目「180度」は「大きく」でもよいのではないか。	「これから迎える超高齢社会では、この視点を <u>180度</u> 変える必要があります。」を、「これから迎える超高齢社会では、この視点を <u>大きく</u> 変える必要があります。」と修正した。
菅生委員	P.1“行動計画策定の趣旨”の最終段落について、「これをより豊かな」を削除し、「超高齢社会をより幸せな」と訂正してはどうか。	「 <u>これをより豊かな社会にして</u> 次世代に引き継ぐことが我々の使命です。」を、「 <u>超高齢社会をより豊かな社会にして</u> 次世代に引き継ぐことが我々の使命です。」と修正した。
泉委員	P.1“行動計画策定の趣旨”の「そうした方々には活躍の場と機会を提供できる仕組みを作ることが、いま求められています。」の部分は、高齢者が自主的に社会参加するというより、用意されたものに参加するというイメージが強	「そうした方々には <u>活躍の場と機会を提供できる</u> 仕組みを作ることが、いま求められています。」を、「そうした方々の <u>意欲が発揮されやすく、活躍できる場と機会がきちんと確保される</u> 仕組みを作ることが、いま求められています。」と修正した。

	いたため、「高齢者がより主体的に関わることができる」といった意味合いの文章を検討してほしい。	
泉委員	P.1 “行動計画策定の趣旨”の最終行、「秋田市は次世代に対する使命と各都市への義務を果たしていくことを表明します。」の部分は大げさを感じる。特に「各都市への義務」の部分は英語を直訳したような、一般社会とはかけ離れたような印象を受ける。	「本行動計画を着実に推進することにより、秋田市は次世代に対する使命と各都市への義務を果たしていくことを表明します。」を「誰もが生き生きと暮らせる社会を実現することが、市民一人ひとりの幸福と社会の活力を育む基盤となるものと考え、秋田市では高齢者の力で社会を活性化する新たなモデルとして、本行動計画を着実に推進していきます。」と修正した。
大塚委員長	市としての立場や意義づけのほかに、秋田市が行動計画を立てることが市民にとってどのように良いのか、という視点を加えてほしい。それにより、関わる市民が意義を感じることができる。	
石沢委員	P.12 基本施策5 除排雪対策の「自助・公助・共助」という言葉はあまり一般的ではない。P.5 (2) 課題に「公、共、私の役割分担」という類似の表現があるが、これ以外に「自助・公助・共助」の説明部分がないとすれば、もう少ししっかりと説明を加えてほしい。	「自助・公助・共助」については、これまでの行政で行っている説明や、議会答弁等との整合性をとるため「自助・共助・公助」の順番に修正した。また説明のため、脚注を追加した。
菅生委員	高齢者の孤立防止、脳の活性化、絆の醸成等の促進のため、日常生活圏域にサロンのような集会所の設置支援、グランドゴルフなどの軽スポーツの	高齢者の孤立防止、脳の活性化、健康づくり、介護予防、サロン活動の支援などとしては、各部局において様々な事業が行われているところであるが、具体的

	<p>場を設置してほしい。高齢者の活動場所の確保について、市の支援を望むという意見として、事務局に検討してほしい。</p>	<p>な取組・事業として行動計画に取り上げ、推進していくこととなる。</p> <p>取組の一例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市民スポーツ活動振興事業 ・健康づくり・生きがいくくり支援事業 ・認知症予防事業(脳健康教室)など
<p>菅生委員</p>	<p>前回、基本方針3の事業として提案した高齢者活性化集合住宅について、その対応について資料1で触れられていない。事務局からはその場で「提案内容について、行政で実現可能な事業かどうか、行政と民間のどちらがどの程度取り組むべきか、慎重に検討していきたい。」と回答があった。そこで、次のとおり新たな提案をする。検討委員会を作り、一つ目として、実現のために解決すべき課題を検討する。二つ目に集合住宅建設のメリットをあげる。検討の結果、課題があまりに多すぎて実現が難しいとなれば、三つ目として、提案の趣旨を取り入れた実現可能な施策の作成を検討する。以上のような検討委員会の設置を提案する。</p>	<p>委員会において説明したとおり、提案内容については、行政において実現可能な事業かどうか、行政と民間のどちらがどの程度取り組むべきか、個人の資産に関してどこまで関与できるかなど課題が多い。今回提案のあった検討委員会の設置についても、関係する機関が多く、どこが主体となってやるべきか、など慎重に検討すべき点が多いため、現段階で本策定委員会において結論を出すことは困難である。</p>
<p>武内委員</p>	<p>今ある基本施策3-1高齢者の住環境の利便性向上、3-2高齢者の孤立防止などは、非常に漠としていてイメージ</p>	<p>新たな施策や事業をスタートさせるに当たっては、長期的な視点、予算配置など検討しなければならない点が多くあり、事業</p>

	<p>が沸きにくい。市民に対して、今後市が思い切って力を入れていくことを見せるためには、少し大胆な提案を検討し、それを示すことによってメッセージが伝わりやすくなるのではないか。</p>	<p>設計に一定の時間も要するため、現時点で新規提案を行動計画に記載することは難しい。しかし行動計画の実施段階では、検証を重ね、次年度や次期行動計画策定時に反映していくこととする。</p>
菅原委員	<p>今回のように具体的な提案があり、検討に値する場合、この策定委員会で簡単に結論が出るものではないため、どこでどのように検討していくのか。市には総合計画、地域福祉計画、エイジフレンドリーシティ構想などがあり、互いに整合性を取りながら進めていくことになっているが、それは具体的にはどういうことか。秋田市高齢者プランや地域福祉計画には「エイジフレンドリーシティ構想を踏まえて～」といった記述は非常に少なく、それぞれが個別に進んでいるように思える。</p>	<p>エイジフレンドリーシティの概念を踏まえ、さまざまな施策を進めることを目指す場合、今回の提案のように横断的な課題を含むものについてはどこが事務局となるのか、非常に難しい問題であると考えているが、できるだけエイジフレンドリーシティ担当者が市内各部署と連携をとり、調整しながら対応していく。</p>
武内委員	<p>全体的にエイジフレンドリーのメッセージとしておとなしい印象を受ける。具体的なイメージが沸くような、市が本当に力を入れていると感じられるような施策をいくつか見せる必要がある。</p> <p>例えばP.12「都市公園バリアフリー化事業」の場合、バリアフリーに整備した公園が増えたとしても市民は実感し</p>	<p>各事業における指標設定については、エイジフレンドリーの視点をできるだけ取り入れ、市民にわかりやすい指標とするよう、再度各課に依頼することとした。</p>

	<p>づらいかもしれない。それよりも、中心市街地にある千秋公園において、より多くの高齢者が坂道を登れるよう工夫し、高齢者の来園者数の伸びを指標にするといったことも考えられる。</p> <p>また、融雪に関する事業についても、凍った歩道など危険箇所をチェックし、融雪施設の設置候補地としてあげていくなど、より具体的なものが望ましい。市役所や県庁周辺の歩道はしっかり融雪・除雪されているが、それだけでは市民生活をカバーしているとは言えず、もっと広い範囲で取組む姿勢を見せる必要がある。</p> <p>他にも、P.13「高齢者コインバス事業」について、ワンコインにすることは一つのスタートではあるが、プラスアルファでノンステップバスや見やすい表示を増やすことも重要である。</p>	
<p>三浦委員</p>	<p>P.18に基本方針4の事業として「はずむスポーツ都市推進事業」が載っているが、基本施策部分にはスポーツという言葉が全く出てこない。</p>	<p>基本施策1「多様な価値観に対応した社会参加の場づくり」の説明文を、「高齢者の多様な価値観に対応して文化・学習・<u>スポーツ</u>などの生涯学習内容の充実を図り、社会参加活動の選択肢を増やします。」とし、スポーツを追加した。</p>
	<p>P.12の「自助・公助・共助」</p>	<p>「自助・公助・共助」について</p>

	<p>の語順はこれでいいのか。除排雪に関してはまずは自分でやるという意味でこの語順としているのか。</p>	<p>は、これまでの行政で行っている説明や、議会答弁等との整合性をとるため「自助・共助・公助」の順番に修正した。また説明のため、脚注を追加した。なお除排雪に関しては、やるべき順番を示したものではなく、それぞれの役割と相互補完の関係性を示すために使用しているものである。</p>
<p>菅生委員</p>	<p>P. 17 基本方針4の具体的な取組・事業に関して、参加できるのはそれなりの知識や意欲のある一部の限られた高齢者である。問題は、それ以外の多くの平凡な高齢者、閉じこもりがちな高齢者である。そういった高齢者が、秋田に住んでいて本当に幸せだなど感じる事が大事だと思う。そのためにも、やはり日常生活圏域にサロンや軽い運動ができる場所などがほしい。</p>	<p>高齢者の孤立防止、脳の活性化、健康づくり、介護予防、サロン活動の支援などとしては、各部局において様々な事業が行われているところであるが、具体的な取組・事業として行動計画に取り上げ、推進していくこととなる。</p> <p>取組の一例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 市民スポーツ活動振興事業 ・ 健康づくり・生きがいづくり支援事業 ・ 認知症予防事業(脳の健康教室) など
<p>渡辺委員</p>	<p>行動計画には、多数の事業を掲載するというより、実現可能な事業を選別して載せ、WHOへ提出すべきではないか。現状値や目標値についても、数値化可能な事業ばかりではない。</p> <p>市民中心の行動計画については、この街に住んでよかったと感じることが究極のエイジフレンドリーと言えるこ</p>	<p>行動計画には、各部局における具体的な取組・事業のうち、より重点的な取組について記載している。他の事業については、別冊として進捗状況の管理と強化を図っていく予定である。</p> <p>市民中心の行動計画の実施が、本行動計画における大きな柱の一つと考えていることから、市民と行政が連携をとり、着実に</p>

	とから、市民中心の活動部分に積極的に援助等をしてほしい。	進めていくものである。
武内委員	サロンへの参加者数や外出の機会等を指標としてはどうか。例えば、なぜ行けないのか、といったアンケート調査等を行うことにより、高齢者の社会参加を計る具体的な指標となると思う。	高齢者を含む市民に対するエイジフレンドリーシティに関するアンケートは、平成22年度に実施し、その中で社会参加等についても調査したところである。引き続き、各事業における参加者数、アンケート調査の実施などを通じて、現状把握していく。 H 2 2 年度実施アンケート： http://www.city.akita.akita.jp/city/wf/lg/age-friendly/anke-to/default.htm
大塚委員	P. 3 5 「3 今後に向けて」の最終段落からは、秋田市の意気込みが伝わってくる。特に、「これまでの行政主導型の市政運営から、行政、企業、団体、市民が共同体となり、」の部分に秋田市のこれからの方向性が示されている。一方で、第2章は「市民中心の行動計画について」となっているため、共同体となって取り組んでいくという部分が見えづらいのではないかと。行政と市民を分けてしまうのではなく、共同体であることがイメージできる表現を検討してほしい。	P. 3 5 「3 今後に向けて」は、第2章「市民中心の行動計画について」のまとめ部分として、市民と行政が連携して行動計画の実施を推進していくことを記載しているものである。